

英語語法文法学会 第17回大会資料

日時：2009年10月24日（土）

開催地：龍谷大学（大宮学舎）

住所：〒600-8268

京都市下京区七条通大宮東入大工町 125 番地の 1
[http:// www.ryukoku.ac.jp](http://www.ryukoku.ac.jp)

- 徒歩の場合：JR「京都」駅「（烏丸）中央口」から徒歩約12分。
- バスの場合：JR「京都」駅から市バス約5分、あるいは、
阪急京都線「大宮」駅から市バス約5分。

英語語法文法学会
Society of English Grammar & Usage

September 2009

英語語法文法学会 第 17 回大会プログラム

(会費 4,000 円 当日会費 1,500 円 予稿集 500 円)

日 時： 2009 年 10 月 24 日 (土)

<昼食は、大学内生協も営業していますが、駅周辺での購入をお勧めします>

開催地： 龍谷大学 (大宮学舎) 【構内は全面禁煙です】

住所： 〒600-8268

京都市下京区七条通大宮東入大工町 125 番地の 1 (Tel. 075-343-3311)

[http:// www.ryukoku.ac.jp](http://www.ryukoku.ac.jp)

(JR「京都」駅から市バス約 5 分、あるいは、阪急京都線「大宮」駅から市バス約 5 分。「京都」駅「(烏丸) 中央口」から徒歩約 12 分))

開催校委員： 五十嵐海理

ワークショップ (南覺 (なんこう) 204 講義室) ● 研究発表 (南覺 203・204 講義室) ● 総会 (清和館 3 階ホール) ● シンポジウム (清和館 3 階ホール) ● 会員休憩室 (南覺 202 講義室) ● 司会者控え室 (南覺 106 演習室) ● 関係者 (ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者) 控え室 (南覺 107 演習室) ● 書籍展示 (南覺 202 講義室) ● 運営委員会室・大会本部 (清和館 3 階会議室)

受付： 10 時 30 分より 南覺 (なんこう) 2 階ホール

ワークショップ (南覺 2 階 204 講義室) 10.45 - 11.45

司会 林 龍次郎 (聖心女子大学)

1. 「He built a house 型表現はなぜ好んで使われるのか」

金子輝美 (愛知淑徳大学非常勤)

2. 「慣用的表現に含まれる it の指示対象をめぐる」 中村 聡 (跡見学園女子大学)

3. 「Car と run の共起について—日本人大学生のエラーをめぐる—」

藤本和子 (創価大学)

4. 「Stronger than usual acid は可能か」

廣江 顕 (尚綱大学)

受付：12時30分より 南費 2階ホール

研究発表 13.00 - 14.45

第1室 (南費 2階 203 講義室)

司会 松村瑞子 (九州大学)

1. 13.00-13.35 Will / Shall be -ing 構文の「特別用法」に関する一考察
佐藤健児 (日本大学大学院)
2. 13.35 -14.10 「未来表現 be about to の用法」
衛藤圭一 (京都外国語大学非常勤)
3. 14.10 -14.45 「「客観性」と補文標識 that の出没—確信性を表す sure, confident, certain の比較—」
土屋知洋 (国立岐阜工業高等専門学校)

第2室 (南費 2階 204 講義室)

司会 澤田茂保 (金沢大学)

1. 13.00 -13.35 「結果構文における字義的解釈と誇張解釈について」
工藤 俊 (筑波大学大学院)
2. 13.35 -14.10 「動作表現構文における他動性と意味的特性」
小葉哲哉 (筑波大学大学院)
3. 14.10 -14.45 「動詞 pour はなぜ場所格交代できないのか」
吉川裕介 (龍谷大学非常勤)

総会 (清和館 3階ホール) 15.00 - 15.20

- 開会の辞 会長 安井 泉 (筑波大学)
- 開催校代表挨拶 福本幸之 (龍谷大学)
- 学会賞選考報告 会長 安井 泉 (筑波大学)
- 事務局報告 事務局長 吉良文孝 (日本大学)

シンポジウム (清和館 3階ホール) 15.35 - 17.45

テーマ 「大規模コーパスを英語研究に有効利用するための留意点について」

司会 大室剛志 (名古屋大学)

1. 「辞書編集におけるコーパス活用」 井上永幸 (徳島大学)
2. 「周辺部を記述するための大規模コーパスの利用：その方法と留意点」
滝沢直宏 (名古屋大学)
3. 「コンコーダンス・ラインが語ること、語らないこと：英語評価表現の場合」
深谷輝彦 (相山女学園大学)

閉会の辞 五十嵐海理 (龍谷大学)

懇親会 18.00 -19.30 会場：清和館 1階食堂 (懇親会費：一般 4,000円 学生 2,000円)

連絡先：英語語法文法学会事務局

(〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 日本大学文理学部英文学科 吉良研究室内)

Tel 03-5317-9709 Fax 03-5317-9336 email: kira@chs.nihon-u.ac.jp

ワークショップ（南麓2階 204講義室） 10.45 – 11.45

司会 林 龍次郎（聖心女子大学）

He built a house 型表現はなぜ好んで使われるのか

金子輝美（愛知淑徳大学非常勤）

(1) He built a house.

(2) He had his house built.

(1)は文脈によって、①「自分の手で家を建てた」と②「家を建ててもらった(建てさせた)」という2つの読みが日英両言語で可能である。実際には、②を表わすために、(2)よりも(1)が好んで使われることが多いのはなぜだろうか。(3),(4)も視野に入れて、この種の表現の成立に英語の特質がどのように関わっているのかを考察する。

(3) *He took his picture. / *He pulled out his tooth at the dentist's. / *He examined his lungs. / *He implanted the chip in his arm. / *He registered his letter.

(4) She cut her hair short at the salon. / She dyed her hair brown. / She painted her house. / Nixon bombed Hanoi. / She buried her husband. / That school teaches French. / The singer recorded the songs for the new album. / Nowadays we recycle cans.

(3)は「彼は写真を撮った」、「歯を抜いた」、「肺を検査した」、「チップを腕に埋めた」というように、日本語では極めて自然な「行為者潜在表現（介在性表現）」であるが、英語では容認されない。他方、(4)は両言語で容認されるのはなぜか。「誰がこの家を建てたのか」と問われて、「大工さん」と答えることは日英両言語でまず考えられない。これは何を示唆するのか。「建築主→（発注）→業者（行為者）→（実働）→結果」というスキーマで、情報伝達上は当然「建築主」と「結果」が焦点化される。

慣用的表現に含まれる it の指示対象をめぐって

中村 聡（跡見学園女子大学）

本発表では、it を含む次のような慣用的表現を考察対象とする。

(1) A: I think I'll try to climb Mt Asama.

B: I suppose it's as easy as ABC. I'm not familiar with the terrain, though.

(2) A: My car broke down again the other day.

B: It can't be helped. You've been driving it for more than twenty years.

it の前方照応機能を that のそれと対比させ、両者の選択について論じた代表的先行研究である Kamio & Thomas (1999) の情報の新旧からの説明 (it の指示対象は談話に導入される前から話し手が既に持っていた知識でなければならない) も、K & T の問題点を指摘し、それに代わる視点から実例を分析した拙論(1996, 1998, 2007, 2008) の主張 (指示対象に対して強い感情を示す場合に話し手は that を選び、

そのような感情を示さない場合は *it* を選ぶ) も、(1)と(2) においてなぜ *that* ではなく *it* が選ばれるのかを十分に説明できない。

この問題を解決するために、本発表では、上記のような例においては、*it* は A の発言内容を示す前方照応代名詞ではなく、B が発した文の省略された補部を指す preparatory *it* であることを主張する。

Car と Run の共起について—日本人大学生のエラーをめぐる—

藤本和子 (創価大学)

日本人大学生への elicitation test で、「車が走る」という意味で *car* と自動詞 *run* を用いる傾向が見られた。*Car* と共起する自動詞 *run* については、日本人英語学習者の指導において留意すべき点があると考えられる。

まず、*car* とともに用いられる自動詞 *run* の意味を自動詞 *move* の意味と比較しながらつかみ、(1a)が容認されない理由は、文中での *run* の意味のためであることを論じる。また、(2)において、*run* はどのような意味をもち、この文は、何に焦点が置かれるのかについて述べる。

(1) a. *The car was running too fast for me to see the number plate.

(LDCommon Errors² 1996: 290) (下線発表者。以下同様)

b. The car was moving too fast for me to see the number plate. (Ibid.)

(2) The car is running well.

BNC 検索、英英辞典検索、ネイティヴインフォーマントのコメントなどから、*car* と自動詞 *run* の共起の問題点について論じ、日本人英語学習者に何を教えるとよいかを考えてみたいと思う。英和辞典、和英辞典の記述において疑問に思われるものも検討してみたい。

Stronger than usual acid は可能か

廣江 顕 (尚綱大学)

一般に形容詞句が名詞を修飾する場合、以下(1a)に例示されているように、どのような連鎖でも可能なわけではなく、(1a)のような環境では修飾する形容詞句の主要部は一番右側、つまり、名詞の直前に配置されなければいけない。

(1) a. The company reported **better than expected earnings*.

b. The company reported *better-than-expected earnings*.

しかしながら、(1b)で観察されるように、ハイフンを付せばその条件に違反することなく、かつ構造的な曖昧性をも排除することが出来る (Huddleston and Pullum (2002)).

本発表では、(1b)のようにハイフンを付さなくても容認される事実があること

を指摘し、可能な限りその統語的特徴を捉えてみたい。

- (2) One day in 1811 when *a stronger than usual acid* was used to clean the tanks and, where they came in contact with cold surfaces, dark, metallic-looking crystals were deposited. (*Serendipity: Accidental Discoveries in Science*)

研究発表 13.00 - 14.45

第 1 室 (南費 2 階 203 講義室)

司会 松村瑞子 (九州大学)

Will / Shall be -ing 構文の特別用法に関する一考察

佐藤健児 (日本大学大学院)

一般に「未来進行形」の名称で知られる will / shall be -ing 構文には、以下の3つの用法が確認される (Cf. 江川 (1991³: 233))。

- (1) a. 未来のある時点で進行中または継続中の動作
(At this time tomorrow we'll be sailing (across) the Caribbean.)
b. 現在進行中の動作の推量
(Go back now; your mother will be wondering where you are.)
c. 当然の成り行きの未来
(I'll be seeing her tomorrow, so I'll give her your message.)

本発表では、これらの用法の中から、しばしば「特別用法」として扱われる「当然の成り行きの未来」(future-as-a-matter-of-course) 用法を取り上げ、言語資料に基づき、当該用法の意味上、語用論上の特性を明らかにする。

具体的な作業は以下の通りである。まず始めに、先行研究に従い、当該用法には進行相の意味も主語の意志も含まれないことを確認する。次に、当該用法に関する意味分析の先行研究として、Leech (2004³) の 'prediction + arrangement' という考え方を取り上げ、その問題点を指摘する。最後に、同じく Leech (2004³) が提示する意味的、語用論的制約の妥当性を検証する。

未来表現 *be about to* の用法

衛藤圭一（京都外国語大学非常勤）

本発表の目的は2つあり、1つは、*be about to* の意味と用法を、*be going to* との比較を通じて明らかにすることである。周知のように、前者は後者よりも時間的に接近していることを表すが、たとえば次に示すように、両者が同義に用いられる場合があることを、辞書の用例や先行研究を基に指摘する。

(1) a. She looked as if she *was about to* cry. (CALD)

b. He looked as if he *was going to* cry. (LDOCE)

もう1つの目的は、*be about to* の典型的な使用場面を示すことである。使用例を観察すると、相手に指示、勧誘、指図などをする際に、*be about to* を用いることで「いまにも始まるからそうしなさい」と理由を添えていることがわかる。ただし、次に示すように、場合によっては *be about to* と *be going to* が交換可能であるように見える。

(2) a. Look out! We're *going to* crash! (Swan 2005)

b. Look out! You're *about to* step in a puddle. (Celce-Murcia & Larsen-Freeman 1998)

そこで、本発表ではどのような原理に基づいて、両者の使い分けがなされるのかについて考察を行うことにしたい。

「客観性」と補文標識 *that* の出沒

—確信性を表す *sure, confident, certain* の比較—

土屋知洋（国立岐阜工業高等専門学校）

本発表の主眼は、確信性を意味する形容詞 *sure, confident, certain* に焦点をあてて、各形容詞の有する意味が補文標識 *that* の有無という統語形式と密接に結びついていることを実証的に論じることである。

動詞に比べ、形容詞と補文標識 *that* の出沒に焦点をあてた研究はこれまであまりなされてこなかった。また、その研究結果は Biber *et al.* (1999: 680ff) などに散見されるレジスター（話し言葉か書き言葉）の相違が *that* 出沒を決定する主要因というものであった。しかしながら、コーパスで調査をしてみると、実際には話し言葉に於いて補文標識 *that* を頻繁に従える（本発表では *THAT* 型と呼ぶ）形容詞も存在する。

そこで、本発表では意味的統語研究という立場から、冒頭にあげた各形容詞の意味に「客観性」（本発表では“根拠に基づき命題内容の真偽を決定”することをいう）が存在するかどうかを *THAT* 型の共起傾向と関連していることを明らかにする。また、各形容詞が *THAT* 型或いは *ZERO* 型（補文標識 *that* のない形）に従える際に、各形容詞の有する確信性にどのような違いが生じているのかを考察し、表される意味と *that* の有無が密接に関係していることを提案したい。

結果構文における字義的解釈と誇張解釈について

工藤 俊 (筑波大学大学院)

本発表の目的は、(1a, b)に示すような結果構文における解釈の違いを、談話の観点から明らかにすることである。

(1) a. I painted the car yellow. (Simpson (1983:143))

b. He cried his eyes out. (Simpson (1983:146))

従来、結果構文は「動詞によって表される行為の結果」を表すとされてきた。たとえば(1a)は、「(「塗る」という行為によって)車は黄色になった」という意味を表す。しかし、(1b)は「(「泣く」という行為によって)目が腫れた」というような文字通りの意味ではなく、「目が腫れる“ほど”泣いた」のように、誇張の意味を表す結果構文である。

(1)の両例は[NP V NP XP]という共通の統語形式を有するにもかかわらず、なぜこのような解釈の違いが生じるのだろうか。この問いに対して Miyata (2004)は、文レベルの情報で解釈が決定されると主張している。しかし実際は、話し手の意図との関係で、字義的解釈と誇張解釈の結果構文が生じるそれぞれの談話において語用論的に決定されることを、具体的な証拠を挙げながら実証する。

動作表現構文における他動性と意味的特性

小葉哲哉 (筑波大学大学院)

本発表では、smile thanks や nod agreement のような表現が生起する文を動作表現構文 (大室 2000) と呼び、その他動性について考察する。動作表現構文は自動詞に名詞句が後続しており、他動詞文としての振る舞いを示さないことが知られている。例えば、(1) のように受動文が容認されないことが先行研究で指摘されている。

(1) *Her grateful thanks were smiled by Rilla. (Massam 1990)

しかし、興味深いことに、受動文として容認される (2) のような例もあり、他動詞文としての特性も見られることが分かる。

(2) Warm thanks were smiled at the audience. (Felser and Wanner 2001)

この他にも、他動詞文としての統語的性質を示す事例と示さない事例が観察される。

本発表では、動作表現構文の統語的振る舞いが thanks や agreement のような名詞句の意味的特性と関係していることを論じる。特に、そうした名詞句が (i) 達成目的語 (effected object) としての性質をもち、(ii) 動作主に帰属する事物を表すことを論じ、(1) (2) のような相反する統語的振る舞いに対して説明を試みる。

動詞 pour はなぜ場所格交代できないのか

吉川裕介（龍谷大学非常勤）

英語には(1)が示すように、目的語位置に生起する主体 butter と、前置詞句で示される場所 bread とが交代可能となる現象があり、これを場所格交代(locative alternation)と呼ぶ。

(1) a. John spread butter on the bread.

b. John spread the bread with butter.

動詞 pour は場所格交代不可な動詞として、先行研究でも多く取り上げられているが、なぜ pour が場所格交代できないのかについてはほとんど議論されてこなかった。

(2) a. She poured water into the glass.

b. *She poured the glass with water.

本発表の主眼は、動詞 pour が場所格交代不可である要因を、語彙意味論の立場から実証的に明らかにするところにある。具体的には、動詞 pour の語彙的意味を、幾つかの意味的テストや大規模コーパスなどを基に検証し、動詞 pour の意味役割に含まれる container (location)が、「液体の移動先」ではなく、「液体の出処」を示す点を実証的に指摘する。

〈シンポジウム〉（清和館 3 階ホール） 15. 35 - 17. 45

テーマ

「大規模コーパスを英語研究に有効利用するための留意点について」

司会 大室剛志（名古屋大学）

現代英語の大規模コーパス、特にBank of Englishを始めとするCOBUILD系コーパスとBritish National Corpusの普及により、英和辞典の編纂や英語の語法文法研究にコーパスが盛んに利用されてきている。コーパスを正しく利用すれば、有益な研究成果を生む可能性があるが、コーパスを誤って使用すれば、害を生む可能性すらありうる。そこで、本シンポジウムでは、各講師に具体的な語彙なり、構文なり、両者の関係なりを1つ、あるいは複数取り上げていただき、各講師の研究上の立場から、それらに関して具体的な分析を行っていただき、それらの分析を通して、大規模コーパスを英和辞典の編纂や英語の語法文法研究に有効利用するための留意点について論じてもらうことにする。

まず、井上講師が、大規模コーパス分析の結果をどのように実際の辞書項目として反映してゆけばよいのかについて、先行研究の検証、従来の辞書にない新記述という2つの観点から、具体例を交えながら論じる。次に、滝沢講師が、詳細な記述文法書においても（ほとんど）記述が行われていない周辺の構文の研究に、大規模コーパスの利用が必須であることを、具体例を基に論じる。併せて、コーパスを利用する際にどのような点に留意することが重要であるかについても議論する。最後に、深谷講師が、英語の評価表現(e.g. She was a beautiful and considerate young girl.)を取り上げ、評価表現を分析する過程で、コンコーダンス・ラインから読み取れること、読み取れないことを明らかにする。同時に、大規模コーパスを扱う場合、そのサブ・コーパスの十分な理解が大切である点を論じる。

辞書編集におけるコーパス活用

井上永幸（徳島大学）

COBUILD 企画の登場と Bank of English の進化が物語っているように、20 世紀末からのコーパスと辞書編集の発展は切っても切れない関係にある。コーパスも大規模化の一途をたどり、Oxford English Corpus (OEC) は 20 億語の壁を越えて今なお増殖中である。用途に応じたコーパスを適切に活用することで、効率的に言語事実に関する情報を収集することが可能となる。

本発表では、特定のターゲットユーザーを意識した辞書編集において、コーパス分析の結果をどのように実際の辞書項目として反映してゆけばよいのか、先行研究の検証、従来の辞書にない新記述という 2 つの観点から、具体例を交えなが

らその可能性について論じてゆく。前者の観点からは、if A should *do* と if A were to *do* における確信度の違い、to 不定詞の否定形である not to *do* と to not *do* など変異形の扱いについて、後者の観点からは、例示や回顧促進の機能を果たす as in, 特定の状態への移行を表す come to [into] A などについて取り上げる。母語話者の無意識による言語使用を観察できるコーパスを活用することで、母語話者にはない視点での分析を可能にしたり、日本人英語学習者ならではの疑問点に答える文法・語法記述が可能となることを示す。

周辺部を記述するための大規模コーパスの利用：その方法と留意点

滝沢直宏（名古屋大学）

Formal training does not necessarily a good teacher make. のような文 (SOV 構文) や April becomes May becomes June. のような文 (ABC 構文) など、これまでの研究においてほとんど取り上げられていない周辺の構文を研究する場合、一般化に必要な用例を読書のみによって集めることは事実上、不可能であり、また Native Speaker の判断もあまり頼りにはできない。よく知られた構文であっても、その中心から外れた周辺の事例について研究しようとする場合には、同様のことが言える。この種の周辺部を扱うには、大規模なコーパスに依拠するのが唯一の妥当な方法ということになる。

本発表では、大規模コーパスの一般的有用性を述べた上で、巨大な語数をもつ大規模コーパスから必要な用例を抽出する方法について議論し、更に大規模コーパス利用にあたっての留意点について議論する。

コンコーダンス・ラインが語ること、語らないこと：英語評価表現の場合

深谷輝彦（相山女学園大学）

大規模コーパスの検索結果を表示する手段として、コンコーダンス・ラインがよく用いられる。その有用性を十分に認めつつ、限界についても認識することが重要である。本発表では英語の評価表現を分析する過程で、コンコーダンス・ラインから読み取れること、読み取れないことを明らかにしたい。

英語の評価表現とは、例えば、次の構文群で生起する beautiful をさす。

- (1) [限定] She was a beautiful and considerate young girl.
- (2) [叙述] She is both beautiful and charming ...
- (3) [+about] There is absolutely nothing beautiful about dying for a cause ...
- (4) [+to 不定詞] ... it was beautiful to see the land so green after years of drought.

例文(1)(2)の beautiful と(3)(4)の beautiful は、同じ評価機能を果たしているのだろうか。beautiful の文法パターンと意味を精査し解釈する必要がある。

英国の高級紙 The Times と大衆紙 The Sun のコーパスを使い、評価表現を同定する二種類の方法を検討する。次に、コーパスから得られた評価表現を選択体系機能言語学者 Martin and Rose (2005, 2007) の appraisal system という枠組みで整理し、評価表現の視点から、Times と Sun のコーパス分析を試みる。同時にコンコーダンス・ラインでは解明しにくい評価的意味を例示する。